

蝶の博物詩

生態44

蝶と蛾



イカリモンガ
(1992年7月16日 谷川岳)

photo by

Nishiyama



ツマキシロナミシャク
(2004年8月10日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態44

蝶と蛾

夏の宵、風を入れようと窓を開けると、待っていましたとばかりに蛾が飛び込んできて、電灯の笠に音を立ててぶつかり、細かい粉をまき散らす。「部屋に入って鱗屑を落とす蛾は嫌い」という人が多いが、蛾の翅や体を手でつかまえないかぎり、鱗粉は落ちない。微細な粉状のものは、実は電灯の笠(ランプシェード)の中に溜まっていた埃である。

体や翅が色の变化した鱗粉で覆われた昆虫を分類学上、鱗翅目(Lepidoptera)という。日本では蝶と蛾を一応区別しているが、ドイツやフランスなどでは区別していない。日本の蝶は約240種、蛾は6,000種ほどで、現在でも次々と新種が報告されている。

蝶と蛾の違いはどこか？ ドイツでは蝶をTagfalter、蛾をNachtfalter(夜の蝶)という。余談であるが、夜の蝶といえば美しく着飾った特殊な職業の女性を意味する懐かしい響きがある。蝶は美しく、蛾は汚いというのは偏見であり、マダガスカルに生息しているニシキオオツバメガが世界一美しい鱗翅類といわれるほか、美しい蛾は少なくない。一般に森の奥に住み、夜行性の蛾は派手な色彩の翅を持つ必要がなく、隠蔽色の灰褐色が基調である。地球の白亜紀に入って被子植物の多様な分化が始まり、草原の植物に依存する蝶と蛾の間も翅の模様、色彩が多彩、美麗となってきた。

写真のイカリモンガはその好例であろう。初夏、目の前をゆっくりと飛び、翅を立て、花に止まった姿を初めてみたときは蝶かと思い、疑わなかった。尾状突起まで備えたアゲハモドキは昼間ゆっくりと飛び、まるでジャコウアゲハの雄か、クロアゲハに酷似する。有毒で、鳥も食べないジャコウアゲハに擬態した姿をすでに掲げた(本誌39巻2号)。また胴体が太く、翅が透明のオオスカシバは素早く飛び、花で吸蜜する。もっとも原始的といわれるコウモリガ科の蛾は名のごとく薄暮の迫る頃、空き地を活発に飛んでいた。その仲間のキマダラコウモリは、1万個ほどの卵を無責任に飛びながらばらまくので有名である。

蝶と蛾を区別するのに、触角の形は少なくともわが国では実用的である。蝶の触角は先端がふくれた棍棒状であるが、蛾の場合は細い糸状か鋸歯状ないし羽毛状である。蝶の触角は触覚と嗅覚を司る器官であるが、暗闇で活動する雄の触覚は雌のフェロモンを感知するのに重要な働きをもつ。雄の触角は雌のそれよりもフサフサして、レセプターが多く存在する。

以上のように、蝶と蛾の区別は例外が多すぎて不可能である。したがって、現在は鱗翅目の代わりにチョウ目(またはガ目)といわれるようになったが、これに不満足な蝶屋は多いに違いない。

“蝶”のつくりの葉は葉、つまり薄くペラペラの様を示す。“蛾”のつくりは“われ”ではなく“かどがとがった”という意味である(藤堂明保 著『漢字の話 上』)。つまり蛾の触角はギザギザで角張った輪郭である点が蝶と異なると解釈される。蛾眉は美人の眉のことであるから、蛾を汚いと忌避するのは大変失礼である。

西山茂夫